

伊野川から忠別川までの地名⑩

前回は、掲載地図(明治三十一年製版
複製五万図による地図)のマタルク
シペシ(mata-ru-kus-pet冬・道・通
る・川↓現・拓北川)と、サクルーチシペ
シ(sak-ru-cis-pet夏・峠・川↓現・
江丹別上流川)の踏査記録を紹介した。
ところが、安政四年(一八五七年)に、

松浦武四郎が聞いたサクル(sak-ru
夏・道)は、報文日誌の「再篙石狩日誌」
安政六年(一八五九年)の『東西蝦夷山
川地理取調図』も、地図①のよう、左
股の川が、シヤクルクシペシ(sak-ru
-kus-pet夏・道・通る・川)となつて
いる[註]「シマクは、「シヤク」(sak
夏)の誤植」。すなわち、掲載地図のエラ
マンテウシペシ(現・西里川)がこれに
該当する。

近文の荒井源次郎翁も、「魚や山菜採
りには左股を上り、熊狩りの時は右股

のマタルクシペシ(↓現・拓北川)を
上った」と教えて下さった。(写真②は、
西里川の踏査風景)

これらから、掲載地図のエラマンテ
ウシペシ(iramante-us-pet狩り
を・いつもする・川↓現・西里川)も、サタ
ル(sak-ru夏・道)と判断した。西里川
筋には、明治三十五年(下幌加内から
山越えして、苅り分け道路が作られた。
しかし、明治四十一年に和寒峠が開削
されて、この道は使用されなくなった。
昭和三十年代から江丹別峠復活の運動
があり、昭和四十二年に、主要地方道七
十二号の「旭川幌加内線」が、旧道とは
異なり、拓北川側から道が付けられ、江
丹別峠を越えて幌加内町と結ばれた。
さて、上川管内のマタル(mata-ru
冬・道)とサクル(sak-ru夏・道)が、現



①『東西蝦夷山川地理取調図』



②西里川踏査—昭和62年9月3日

在、最も活用されているのは、塩狩峠の
ある国道四十号と、塩狩駅のあるJR
宗谷本線が通っているマタルクシケネ
プチ(mata-ru-kus-kenepuci
冬・道・通る・剣淵川↓現・マタルクシ
ケネプチ川)と、和寒からタカス峠に向
かう、サクルクシケネプチ(sak-ru-k
us-kenepuci夏・道・通る・剣淵川↓
現・剣淵川)である。

ていたことを記録している。

文化四年(一八〇七年)に、近藤重蔵が
天塩川筋から石狩
川筋の比布町の夕
ナシ(tanas-i高
くなくとも、も
の↓現・棚瀬山2
14ヶ所へ山越え
したルートとして
も有名である。
他方、松浦武四
郎の蝦夷地開拓経
営の建言、報告書

その留萌へのルートは、掲載地図の
江丹別川のルオペシ(ruo-pet道・
付いている・川)からではなく、掲載地
図の石狩川の支流・アヌトウラシナイ
(an-nu-turasi-nay我らG・よく・
登って行く・沢↓現・鱒取川)、すなわ
ち、雨竜郡の多度志(タトウシナイtati-
us-nay樺・群生する・沢)へ行くのに、
この沢を登って行ったのである。多度
志からは、チクシペシ(ci-kus-pet
我ら・通る・川↓現・秩父別川)を通り、
ここから雨竜川を渡河した。



その後、幌新太刀別川(ポロニタツペ
pporo-nitatu-pet大きい・湿地
の川)、その支流の恵比寿川(エピソマ
pe-pis-oma-頭・浜・へ入って行
く・もの川)から山越えして、留萌川
筋へ出て、ル、モツペ(留萌)へ向かっ
たのである。壮大なルートであった。

(アイヌ語地名研究会幹事)
※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

121

高橋 基